

## 活動報告書

報告者氏名:佐藤 誠

所属:筑波大学附属久里浜特別支援学校 記録日:平成 27 年2月 25 日

### 【対象児の情報】

・学年

小学部2年

・障害名

知的障がいを伴う自閉症

・障害と困難の内容

【コミュニケーションにおける困難】

○自分の思いが伝わらなかったときや、スケジュールの変更に対して、他者をたたいたり、大きな声を出したりすることがある。

【認知・理解における困難】

○教師の「Y君、〇〇を取ってくれるかな？」等の簡単な2、3語文での要求や依頼を聞いて、理解し行動することはできるが、自分から、2、3語文で要求や依頼が難しく、単語で伝える場面が多いため、自分の思いが他者に理解してもらえないことが多い。

○知っている事物では、「何？」と聞かれて、事物のイラストを手掛かりに、単語で答えたり、「〇〇はどれ？」と聞かれて、指差して答えたりできるが、言語のみの質問に答えることは難しい。

### 【活動目的】

・当初のねらい

- (1) 他者に、自分の経験や思いを、身振りや音声言語で表現したり伝えたりすることができる。
- (2) 自分が取り組む活動や取り組んだ活動を、自発的に確認し、安心して活動に取り組むことができる。

・実施期間

平成 26 年6月 16 日～平成 27 年2月 28 日

・実施者

佐藤 誠

・実施者と対象児の関係

担任

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

①PEP3によるアセスメントの結果から

前年度に実施したPEP-3(自閉症スペクトラムや関連する発達障害を特徴付ける、不均衡な学習の強みと弱みを評価するために考案された検査で)によるアセスメントの主な領域別検査結果は以下のとおりであった。

主な領域別検査結果(平成 25 年4月(7歳0月)実施)

	発達年齢	パーセンタイル順位	発達／適応レベル
1. 認知／前言語	3歳 10 か月	53	中度
2. 表出言語	1歳 11 か月	26	中度
3. 理解言語	2歳2か月	36	中度
4. 微細運動	3歳6か月	58	中度
5. 粗大運動	2歳8か月	31	中度
6. 視覚－運動の模倣	2歳8か月	35	中度

主な芽生え反応(できつつある部分で、今後の支援を考えていく項目)と不合格の検査項目

	芽生え(できつつある部分)	不合格
1. 認知／前言語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の行動を模倣されることへの反応 (16-32)</li> <li>・自分の声を模倣されることへの反応 (16-23)</li> <li>・<u>絵本に対する興味 (22-24)</u></li> <li>・12 枚のカテゴリーカードを実演なしで色か形かで分類する (35-38)</li> <li>・8片のパズル片で男の子の形を作る (48-50)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2短文(3, 4語からなる)の復唱 (23-24)</li> <li>・<u>5つの物の使い方を身振りで表す (26-27)</u></li> <li>・3 数の復唱 (30-34)</li> </ul>
2. 表出言語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・助けを求めるのに、<u>言葉や身振りを使う (24-28)</u></li> <li>・絵にある物の名前のうち、14 個正しく言葉でいうことができる (36-48)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2 語文の使用 (18-24)</li> <li>・適切な4, 5語からなる 1 文を話す (36-42)</li> </ul>
3. 理解言語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・物の名前を言われて、20 のうち 14 個の絵を正しく指差す (58-60)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1, 2段階からなる4つの指示に従う (12)</li> </ul>

※ ( )は月齢 例: (16-32)→(16 か月(1 歳4か月)－32 か月(2歳8か月))

アセスメントの結果から、認知／前言語では、男の子のパズル、絵本への興味などで、芽生え反応が見られていた。しかし、2年生4、5月、個別の課題学習を中心に行ったインフォーマルなアセスメントでは、上表の下線部以外の項目(8片のパズル、12 枚のカテゴリーカードなど)の項目は成長が見られ、合格もしくは合格に近い項目であった。これらのことから、それらの項目以外の下線部(絵本に対する興味、言葉や身振り)に着目し、具体物を操作しながら、教師とやりとりをする学習を行うことが、全体像をイメージする力を高めたり、部分的な手掛かりに注目したりすることにつながると考えた。表出言語では、図形、色、文字、数字を見て、名称を言ったり書いたりする検査項目に合格が見られ、援助の要求に対す

る言葉や身振りに芽生え反応が見られた。それらの結果から、物の名前を言う力は身に付いてきているので、身振りを合わせた動詞や形容詞の学習に取り組むとよいと考えた。

## ② 日常の学校生活の様子から

- ・前年度に比べて、教室以外の場所への興味が広がり、「おそと、(行く)。」「おひさまぶんこ(図書室)、(行く)。」など自分から伝えるようになった。しかし、雨が降っていても、外に行くことにこだわったり、遊びの途中で、休み時間の終了を伝え、気持ちの切り替えができず、イライラして次の活動に移ることができなかつたりする姿が見られる。
- ・毎日の時間割は母親と毎朝、週計画を手掛かりに確認したり、前日の帰りの会で確認したりすることで、落ち着いて活動に参加することができる。しかし、急なスケジュールの変更に対しては、受け入れられずに他者をたたいたり、大きな声を出したりする姿が見られる。

## ○ 活動の具体的内容

ねらい(1)(2)共に、本児がストレスなく継続した活動できることを考慮し、操作が簡単なアプリを選択することとした。しかし、活動を進める中で、本児の実態やツールの利便性に応じて、タブレット端末にこだわらず、これまで使ってきたデジカメなどの ICT 機器の活用も意識するようになった。

### (1) 他者に、自分の経験や思いを身振りや音声言語で表現したり伝えたりすることができる。

- ・友達や自分の様子を、自分で iPad 付属のカメラアプリや、デジカメを使って撮影し、記録(校外学習(不定期)、休み時間(週2程度))し、文や語彙を習得するための学習に用いる。文や語彙の習得では、学習指導要領の3つの観点、「聞く・話す」、「読む」、「書く」を意識して取り組むことができるようにした。「書く」活動では、自分や教師が撮影した写真を教材として、文章や単語を書く活動を行うようにした。文章の題材となる写真と手本となる文章は、デジカメや iPad 付属の「カメラ」と「かめら絵日記」を使うことにした。「聞く・話す」、「読む」活動では、声を出して実際の絵本を読んだり聞いたりする活動に加えて、身振りや身体模倣動作の習得をねらい、本児の興味のある言葉や動作を交えたオリジナル絵本を「BookCreator」や「MicrosoftOfficeMobile」で作成、活用するようになった。



カメラ



かめら絵日記



BookCreator



MicrosoftOfficeMobile

### (2) 自分が取り組む活動や取り組んだ活動を、自発的に確認し、安心して活動に取り組むことができる。

- ・活動の見通しをもつことができるように、スケジュールを自分で確認できるようにする。

最初は、教師が「DroptalkHD」を使って、個別の課題学習のスケジュールを提示(毎日)し、本児が、終わった課題を自分で☑を入れて活動の終わりを確認できるようにした。また、休み時間は、本児が、次の活動へスムーズに移行できたり、終わりのまでの時間を意識して、「今日は(時間が長いから)ブランコと滑り台」や「今日は(時間が短いから)ブランコだけ」というように、自分で、教師と簡単な会話を交わし、折り合いを付けて遊ぶことができたりすることをねらいとして、タイムタイマーアプリ「トーキングエイド for iPad タイマー」を使うことができるようにした。



DroptalkHD



トーキングエイド for iPad タイマー

## ○ 対象児の事後の変化

(1) 他者に、自分の経験や思いを身振りや音声言語で表現したり伝えたりすることができる。

① 5、6月(写真撮影:週1、2回程度、ワークシートでの2、3語文の学習「書く」中心:週3回各7分程度)

5月から家庭にiPadを貸与しており、家庭でカメラ機能を使っていたことで、6月の実施開始には、カメラアプリの基本操作はできる状態であった。開始最初は、友達の様子より、自分の表情を撮影することが多かったが、次第に教師の言葉掛けにより、友達の様子や風景を中心に撮影できるようになってきた(写真1)。教師が撮影直後に画像を指差して、「誰?」「何?」と尋ねると、「〇〇くん」「(はたけの)トマト」などと単語で返答する姿が見られた。しかし、2語文での説明には至っていない状況であった。また、個別の課題学習の場で、自分で撮影した写真を使い、3語文で表現する活動については、最初は教師と一緒に1語ずつ確かめながら、ワークシートに記入(写真2)し、手掛かりとして活用することで、少しずつ、「〇〇くんが〇〇する。」等の、音声言語で2、3語文を表出する姿が見られるようになってきた。



写真1 撮影の様子



写真2 ワークシートでの学習の様子

② 9、10月(写真撮影:週1、2回程度、2、3語文の学習「聞く、話す」「読む」「書く」:週3回各7分程度)

(ア) 動物園のジオラマを使った活動

動物園を想定したジオラマを作り、本児と一緒に動物のフィギュアで遊びながら、2、3語文の活動を取り入れた。活動の流れは、

- ① 動物のフィギュアで擬態語、擬音語、2、3語文を交えながら、ごっこ遊びをする。
- ② 教師が2、3語文で「さるが、きに、のぼる。」等の問い掛けし、本児がフィギュアを使って実践して見せる。
- ③ ごっこ遊びや、教師が問い掛けに用いた2、3語文をワークシートに書く。

ワークシートに貼り付けた「さるが、きに、のぼる。」「ふくろうが、きに、とまる。」などの写真は、本児がカメラアプリやデジカメを使って撮影し、文を書く学習に用いるようにした。字形が整わなかったり、完全に習得できていなかったりする文字については、絵日記アプリで手本となる文章と写真を貼り付けたものを提示して、書字の手掛かりとなるようにした。本児は、ごっこ遊びを好み、昨年度もフィギュアを使った活動を行っていたので、学習への意欲は高く、遊びながら、「(動物を横にして)どてっ。」「(2頭の虎を競争させて)たっ、たったっ。」などの擬音語や擬態語を多く発しながら、教師が、「とらが、くさを、たべるよ。」等と3語文で伝えると、「(虎のフィギュアを草に付けて)むしゃ、むしゃ、むしゃ。」と動作と一致する会話が増えてきた。



写真3、4 フィギュアで遊ぶ様子



写真5 書く活動の様子

(イ) 絵本を使った活動:H26.9~H27.2月(週3回程度)

PEP-3によるアセスメント結果より、「身振り」や「絵本に対する興味」に課題が見られた。そこで、本児が好きな絵本「だるまさんが」や、本児の動きを写真で撮影し「BookCreator」に取り込んで作ったオリジナル絵本を教材

として、声を出して読んだり、絵の模倣をしたりすることで、動作を示す2、3語文と身振りを一致することをねらいとした活動を行った。

本児が好きな絵本ということで、最初から「だるまさんと」を、声を出して読むことはできたが、絵を手掛かりとした身体模倣は難しく、「(頭を下げる)ぺこっ。」以外は小さい動きであった。しかし、「BookCreator」で作った本児が主人公のオリジナル絵本を使って、教師と一緒に活動することで、次第に自発的に立ち上がって、絵本に載っている体の動きを模倣するようになった。「だるまさんが」やオリジナル絵本の動きができるようになったあとは、別冊である「だるまさんと」の動きも、自分で本を読みながら模倣する様子が見られた。また、気に入った動作は「もう一回」とリクエストし、繰り返す様子も見られた。



写真6 絵本を読む様子

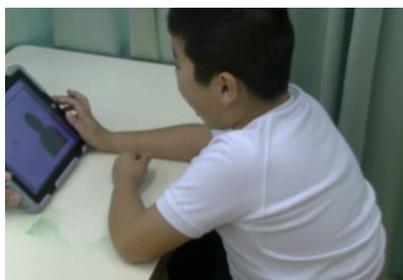


写真7, 8 Book Creatorで作った本を読んで表情や動作の模倣をする様子



## (2) 自分が取り組む活動や取り組んだ活動を、自発的に確認し、安心して活動に取り組むことができる。

### ① 「DroptalkHD」を使った、スケジュール確認:6～9月(週3回程度)

初期段階として、6月20日より個別の課題学習の場での5項目程度のスケジュール提示で、「DroptalkHD」を使用した。最初は、ホワイトボードを使ってスケジュールを示していたものが、iPad に変わり、興味はあるがどのように使ってよいか分からず、学習中に他のアプリを起動させてしまう等、誤操作をすることもあった。しかし、3回の学習を経た後は、教師がキャンパス(スケジュール)を提示しておくこと、自分で画面をスクロールして確認し、最初の挨拶をした後、「さんすう、さんすう」等と独り言を言いながら、自ら課題の入ったボックスを取りに行き、学習に取り組む姿が見られるようになった。また、以前のホワイトボード(写真9)でスケジュール提示を行っている時期は、教師が一つの課題が終わる度に各項目に線を引いていたが、「DroptalkHD」を使うことで、1つの課題が終わる度に、自発的にチェックボックスをクリックし、終わった項目がグレーに変わることを確認して次の活動に取り組む姿も見られるようになった(写真10, 11)。

### ② ホワイトボードを使った、自分でスケジュールを記入する活動:9～2月(週3回程度)

9月中旬より、iPadを使った確認から、教師がスケジュールを入れなくても自分で確認できることを目標として、フィニッシュボックス(片付け箱)や前時の活動を手掛かりに、自分で活動名をホワイトボードに書く活動に変更した。その結果、戸惑いも予想されたが、1回目でスムーズに活動を理解して、2回目からは、始めの挨拶をする前に、自分でボードに活動を記入することができるようになった。

翌年1月になると、課題数を2つほど増やしておくことで、自分の取り組みたい課題を選択、組み合わせてスケジュールを記入する様子が見られるようになった。現在も、本児にとってのこの活動は有効で継続している。



写真9 ホワイトボードスケジュール



写真10 「DroptalkHD」スケジュール



写真11 スケジュールを確認する様子(7月)



写真12 自分でスケジュールを記入する様子(9月)

③ タイムタイマーを使った、スケジュール確認:7～2月(更衣時、昼休み時)

本児は急なスケジュールの変更に対してイライラすることはあるが、教師が、事前にスケジュールカードを提示して視覚的な支援を加えることで、安心してスケジュールを受け入れることができることが多い。また、休み時間は、自分が納得しただけ遊ばないとイライラすることが多い。そこで、事前に自分で時間を確認して遊ぶことをねらいとして、「トーキングエイド for iPad タイマー」を活用するようにした。タイムタイマーのアプリはたくさん紹介されているが、本アプリは残り時間を赤い帯の面積の減少で表示でき、かつ、他のタイムタイマーアプリと比較した際に、5分程度の時間でも赤い帯を見やすいことから選んだ。

7月は、教師が iPad に時間を入力し、本児に残り時間を示す赤い帯を見せ、「赤がなくなったら終わりだよ。」という言葉掛けが中心で、終了ボタンも教師で押していた。最初はルールが分からないこともありイライラすることもあった。しかし、並行して、朝の会でのスケジュールを提示、確認したことや、タイマーを使いながら、途中で「あと、これだけ赤い部分がなくなったら、帰ろうね。」等の残り時間への意識付けの言葉掛けをすることで、5回ほど使うとルールも理解できるようになった。

9月になると、教師が遊ぶことができる時間を伝え、10分までの時間であれば、自分でアプリを開き、時間入力、開始の操作ができるようになり、時間のアラームがなると、自分から教室へ帰る様子が見られるようになった。翌年1月には、20分までの時間を自分で管理できるようになった。



写真 13 タイムタイマーを操作する様子



写真 14 活用する様子(更衣時)

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づきとエビデンス(具体的数値など)

(1) 他者に、自分の経験や思いを身振りや音声言語で表現したり伝えたりすることができる。

・「BookCreator」は、自作絵本に、本児を主人公として取り入れたり、本児の興味のある動きをすぐに取り入れたりできるため、有効であった。自作本だけでなく、既成本「だるまさんが」を読みながら、内容に合わせて体を動かしたり、「もう一回！」と活動のリクエストをしたりする様子が見られた。また、音読への興味も、より一層高まり、既製本「だるまさんが」と BookCreator と2つ要求する日(写真 15)も増えた。

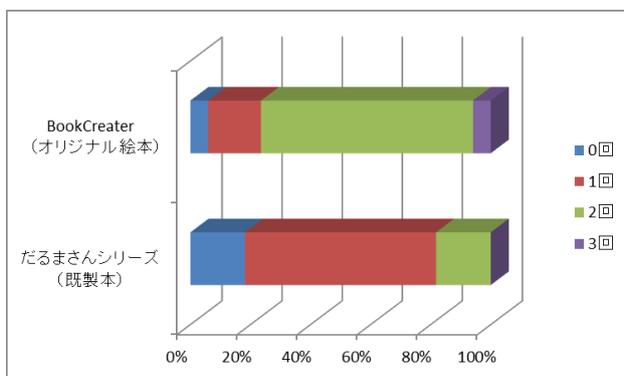


図1 1回の活動で繰り返し読んだ回数の割合



写真 15 既製本と iPad を活用する様子

(2) 自分が取り組む活動や取り組んだ活動を、自発的に確認し、安心して活動に取り組むことができる。

・スケジュールの確認は、「DropTalkHD」に加えて、本児にとっては、ホワイトボードに自分で記入して確認することが有効であった。また、記入に際しては、状況を示す2, 3語文等を書く活動を多く取り入れた頃から自分からペンを持つようになった。文章を書く活動を取り入れたことで、書くことへの興味も増し、スケジュール確認に対しても、マジックで活動を自分で記入したり、終わった活動に線を引いたりする様子が見られた。



写真 16 2, 3語文を書いたワークシート(9月)

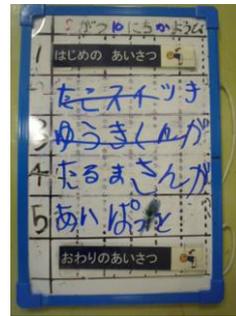


写真 17 本児使用のホワイトボード(2月)

○その他エピソード(画像などを含めて)

・ノンテックの有効性

スケジュール確認の手掛かりは、ホワイトボード→「DropTalkHD」→ホワイトボードという流れで、本児の興味や実態に合わせて、iPad にこだわらず、ノンテックの活用を意識することで、本児が継続かつ有効に活用することができた。

・iPad アプリの有効性

今回の実践において、「BookCreator」の本児にとっての有効性が確認できた。これまでも、読む活動が好きだった本児にとって、更に内容に合わせて身体模倣を継続して取り入れることができたことは、オリジナルの絵本を作ったことで、本児の興味や変容をすぐに取り入れられたことが考えられる。

・文字や単語への興味

今回の、他者に、自分の経験や思いを身振りや音声言語で表現したり伝えたりすることができるための実践を継続する中で、ジェンガのブロックを使って単語を作ったり(写真 18)、平仮名の積木を使って文章を作ったりする(写真 19)など、これまでに見られなかった、文字や単語に対する興味を示す姿が多く見られるようになった。



写真 18 ブロックで単語を作る様子



写真 19 平仮名積木で文章を作る様子